

主 題：弱き者を助けてくださる主

聖書箇所：詩篇 41篇

テーマ：弱き者を助けてくださる神様の姿を知り、ますますこの方をほめたたえる者として歩む

今朝、皆さんとともに見ていきたいみことばは詩篇41篇です。先週もお伝えしましたが、私たちはきょう五つの巻から構成される詩篇150篇のうち、最初の1巻を終えようとしています。これまでに詩篇を通して、愛する神様の偉大さやすばらしさについてさまざまなことを学んできました。そしてきょう見るこの41篇も最初の巻を締めくくるに当たって、私たちに大切なことを教えてくれています。ですから、一緒によく耳を傾けてみましょう。まずいつものようにみことばをお読みします。

詩篇41篇 指揮者のために。ダビデの賛歌

「:1 幸いなことよ。弱っている者に心を配る人は。【主】はわざわいの日にその人を助け出される。:2 【主】は彼を見守り、彼を生きながらえさせ、地上でしあわせな者とされる。どうか彼を敵の意のままにさせないでください。:3 【主】は病の床で彼をささえられる。病むときにどうか彼を全くいやしてくさるようになさい。:4 私は言った。「【主】よ、あわれんでください。私のたましいをいやしてください。私はあなたに罪を犯したからです。」:5 私の敵は、私の悪口を言います。「いつ、彼は死に、その名は滅びるのだろうか。」:6 たとい、人が見舞いに来ても、その人はうそを言い、その心のうちでは、悪意をたくわえ、外に出ては、それを言いふらす。:7 私を憎む者はみな、私について共にささやき、私に対して、悪をたくらむ。:8 「邪悪なものが、彼に取りついている。彼が床に着いたからには、もう二度と起き上がれまい。」:9 私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。:10 しかし、【主】よ。あなたは私をあわれんでください。私を立ち上がらせてください。そうすれば私は、彼らに仕返しができます。:11 このことによって、あなたは私を喜んでおられるのが、わかります。私の敵が私に勝ちどきをあげないからです。:12 誠実を尽くしている私を強くささえ、いつまでも、あなたの御顔の前に立たせてください。:13 ほむべきかな。イスラエルの神、【主】。とこしえから、とこしえまで。アーメン。アーメン。」

さて、内容を見て行く前に、まず皆さんに考えてほしいことがあります。よく自分自身に問いかけてみてください。あなたは神様をますます礼拝する者として今を歩んでいるのでしょうか？もっと言えば、私たちは日曜日にこうしてともに聖書を開いて学んだり、日々の生活の中にあって、個人的にみことばを思いめぐらせて主に祈り、主に仕えながら、愛する神様をより知ろうと願っているはずですが、でも、そうやって神様をより深く知っていくことは、あなたの心に神様へのますますの賛美を生み出しているのでしょうか？大きな感謝や喜びがますます増し加わっているのでしょうか？かつてJ・I・パッカーという先生も、自身の著書「神について」の中で、「人生において、他のいかなるものよりも、大きな喜び、楽しみや満足をもたらす、最高のものは何でしょうか。それは神を知ることです。『主はこう仰せられる。『知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを…』(エレミア9：23-24)。神は人々がどのような状態にあることを、最も喜ばれるのでしょうか。それは神を知っているという状態です。『わたしは…全焼のいけにえより、むしろ神を知ること喜び』(ホセア6：6)と神は言われるのです。…天地の主を知り、その主に仕えること以上に、誇るべき光栄あることが、他にあるのでしょうか。」と述べていました。神様の偉大さを知れば知るほど、私たちはそのすばらしさに心を奪われて、ますます神様をほめたたえたいという思いが増し加わっているのでしょうか。

私たちはこうして今、詩篇を一つずつ学んできていますけれども、詩篇の著者たちはそのことをよくわかっていました。もちろん、これまでに頻繁に考えてきているダビデもそのひとりです。この詩篇41篇の最後13節に「ほむべきかな。イスラエルの神、【主】。とこしえから、とこしえまで。アーメン。アーメン。」と書かれていました。これを読んでもすぐわかるように、詩篇を記したダビデは神様に向かって賛美していました。彼は愛する主の偉大さを覚え、この方の前にへりくだって心からの礼拝をささげていたのです。

でも、興味深いことがあります。それは詩篇の1巻の終わりに、「ほむべきかな。イスラエルの神、【主】」と賛美が述べられていたのと同じように、ほかの巻の終わりもすべて神様へのほめ歌で終わっているということです。どういうことか、よく見てみましょう。1巻に続いて42篇から始まる2巻は72篇まで続いています。72篇の一番最後18-20節に「:18 ほむべきかな。神、【主】、イスラエルの神。ただ、主ひとり、奇しいわざを行う。:19 とこしえに、ほむべきかな。その栄光の御名。その栄光は地に満ちわたれ。アーメン。アーメン。:20 エッサイの子ダビデの祈りは終わった。」と記されて終わっていました。その次に73篇から始まる3巻は89篇まで続き、89篇の最後52節には「ほむべきかな。【主】。とこしえまでも。アーメン。アーメン。」と記されています。続けて4巻は90-106篇まで続くのですけれども、106篇の最後48節に「ほむべきかな。イスラエルの神、【主】。とこしえから、とこしえまで。すべての民が、「アーメン」と言え。ハレルヤ。」と記されていました。そして最後5巻は107篇から始まり150:6で「息のあるものはみな、主をほめたたえよ。ハレルヤ。」と終わっていました。

詩篇は確かにいろいろなことが記されている本です。でもその中心はいつも神様でした。これまでに見てきた詩篇1-40篇を振り返ってみても、まさにそのとおりです。例えば、詩篇1篇では神様がみことばに根差す者たちを祝福し、彼らの道を守ってくださるお方だと教えられていました。詩篇2篇には、油注がれた者、主イエス・キリストが最後にはすべてを支配し、勝利される日がやって来るといふ約束が記されていました。詩篇6篇や32篇には、神様を愛する者にむちを加えられること、またそれだけではなくて、罪を赦すこともできるお方なのだと教えられていました。詩篇7篇には、審判者としてのその姿を、8篇を見れば、創造主としてのその御力を、23篇には羊を導く羊飼いととしての姿を、29篇には輝く栄光にあふれた姿を。そしてこの間学んだ38篇や40篇には苦しみの中にあって、あわれみを示してくださる助け主としての姿が描かれていました。もちろんほかにもたくさんものを挙げることはできます。こうして私たちは詩篇を通してはかり知ることのできない神様の変わらない偉大な姿を、それぞれから学んできているのです。詩篇の著者は、そうやって私たちの目を神様に向けてくれていました。

○ほめたたえられるべき主の三つの姿:

そんな神様の偉大さを覚えた私たちにとってふさわしい応答とはいったい何でしょう。もちろんそれは、今がすべての巻の終わりでも見たように、詩篇の著者やダビデと同じように心からこのすばらしい神様に礼拝をすることです。すばらしい神様を前にした者は、その方をほめたたえることこそが私たちの責任であって、私たちが神様をほめたたえるのは、私たちにとっても最高の喜びをもたらしてくれるものになります。詩篇41篇を通して、改めてそのことを一緒に考えてみましょう。この詩篇を記したダビデは、自分自身が苦しみを味わって弱さを覚える中であって、すべての人がほめたたえるべき神様の三つの姿をここに描いてくれていました。これから内容を見ていくに当たって、私たちが礼拝をささげるべき神様がどれほど偉大なお方なのか、どれほどすばらしいお方なのかを自分自身のこととして改めて考えてみましょう。この神様をまだ知らないという方も、ぜひみことばが教えている神様がどれほどすばらしいお方なのかを自分のこととして考えてみてください。そして、ひとりひとりが神様の偉大さをますます知って、この方にふさわしい賛美をますますささげる者と成長していく助けと励ましになることを心から祈っています。

1. あわれみを示す者をあわれんでくださる方 1-3節

まず一つ目の主の姿が1-3節に記されていました。一つ目の姿は、あわれみを示す者をあわれんでくださる方だということです。1節に「幸いなことよ。弱っている者に心を配る人は。【主】はわざわいの日にその人を助け出される。」と記されていました。ダビデはここで「弱っている者に心を配る人」、その者が幸いな人だと口にしていました。その人が最高の喜びを、最高の満足を持っている人なのだというのです。でも具体的にこの「弱っている者に心を配る人」というのはどんな人物のことを言うのでしょうか。ここでまず「弱っている者」と訳されていることばには、もともと「乏しい」とか「貧しい」という意味があります。そしてそれだけではなくて「弱い」とか「無力な」という意味もあります。つまりこの「弱っている者」というのは、広い意味で経済的な貧しさを覚えているような人や肉体的な衰えを覚えている人、さまざまな痛みやしいたげによって心が弱り切っているような人、そういった弱さを覚えている人のことを言うのです。その人物は、自分で自分をどうすることもできないような、だれかの助けを必要とする無力な人のことを表していました。またここでもう一つ使われていた「心を配る」ということばには「理解する」とか「洞察力や知恵を持って行動する」といった意味が含まれています。これは形だけの助けというよりも、相手の状況のことを注意深く考えてあげて、その人の必要を満たそうとすることを表しているのです。

ですから、これら二つのことばを合わせて考えてみると、ダビデが言う「弱っている者に心を配る人」というのは、だれかの助けを必要とする弱い者の状況を正しく顧みてあげて、その人の抱えている必要を満たそうとする人のことなのです。自分にはもうどうすることもできない、そんな助けを覚えている人の状況をよく顧みてあげて、その人が抱えている必要を満たそうとする人物です。弱っている者を思ってあげて、みずから進んであわれみを示そうとしてあげる人物、それこそが幸いな人物だと言うのです。スポルジョンもこの人物に関してこのような説明をしていました。「神の恵みにあずかっている人は、優しい柔和な性質を受け継いでおり、同胞に対して非情になることはありません。虐げられている人たちの原因を受け止め、彼らの幸いのために真剣に心を傾けようとします。金銭を投げ与えて去ってしまうのではなく、彼らの苦しみについて調べ、その原因をえり分け、彼らを助け出す最善の策を検討し、そして実際に助けようとするのです。」と。間違いなく言えることは、神様のあわれみというものを自分のこととして知っている人は、自分が受けたそのあわれみをほかの人にも示そうとすることです。そしてそんなあわれみは、単なる考えやことばではなくて、自分勝手なものでもなくて、相手の必要を考えた、犠牲を払ったものになるのです。

イエス様がユダヤ人の律法の専門家に語った良きサマリヤ人の例えがまさにその一つでしょう。ルカ10:30からその例えがなされているのですけれども、30-32節を見ると、「:30 イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎ取り、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。:31 たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。:32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。」と書いてありました。エルサレムからエリコに下って行く道中であって、強盗に襲われた人は着物をはぎ取られ、なぐりつけられ、半殺しの状態で、助けがなければ死んでしまうような状態にあったのです。しかし、そこを通りかかった祭司やレビ人たちは、そんな死にかけの人を確かに目にしていながら、道の反対側を通って助けようとはしなかったのです。確実にその人が抱えている必要、問題を見ていながらあわれみを示そうとはしませんでした。しかし、その同じ場所を今度はサマリヤ人が通りかかりました。この当時、ご存じかと思えますけれども、ユダヤ人とサマリヤ人の間には大きな溝がありました。彼らは互いのことを忌み嫌っているような、互いに憎み合っているような関係でした。言うまでもなく、サマリヤ人が通った時に助けが与えられる可能性は最も感じるような関係にあってのことです。

でも、33節から、そのサマリヤ人が通ったことが書かれていました。「:33 ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、:34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。:35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』」と。サマリヤ人はほかに通りかかった者たちとは違っていました。死にかけの弱った者を見て見ぬふりをすることはありませんでした。その者をかわいそうに思ったサマリヤ人は、みずから近寄って行って助けを与えていたのです。そして彼を宿屋に連れて行くだけではなくて、そこでかかる費用をすべて代わりに払うと約束していました。ここに書かれてあったように、サマリヤ人は旅の途中でした。彼には自分の目指している行き先がありました。ましてや自分と敵対するような者がそこにいたのです。自分が介抱してお金を払ってあげたとしても何の見返りも期待できないような相手でした。それでもなお彼は必要を覚えている人のためであれば、喜んでみずから進んでそれを満たそうとしていたのです。確実に言えるのは、彼は自分のことではなくて、必要を覚えている人の最善を、犠牲を払ってかなえようとしていたということです。それがイエス様自身も示されていたあわれみであって、ご自身に従っていく者たちに対しても求められていたあわれみでした。

少し立ち止まって考えてみましょう。果たして私たちが普段示しているあわれみというのは、みことばが教えている、このようなものでしょうか？助けを覚えている人の必要が何かをよく吟味して、本当にその人の必要を喜んで与えようとしているのでしょうか？それとも自分勝手に判断して、自分が痛くない程度、自分が犠牲を払わない程度だけ与えるようなものでしょうか？私たちの示しているこのあわれみでもって、あなたは神様からのあわれみを受けたいでしょうか？確実に言えることは、もし私たちが、神様がどれほどあわれみ深い存在なのかということを知らなかったら、もしくは忘れてしまっているのであれば、周りの人にあわれみを示すことは到底できないということです。もし私たちがそのことを知らないのであれば、忘れていたのであれば、そんな人は自分のことだけにとらわれて、周りの人を見る時に、すぐに自分の基準に当てはめて不満や憤り、非難を口にしてしまうでしょう。人をさばいてしまったりするでしょう。だから私たちはいつも覚えていないといけないのです。私たちはどんな時も思い出さないといけないのです。救われる前の私たちがどんな存在だったかということです。神様がどんな恵みを、あわれみを示してくださったのかということです。私たちはだれひとりとして例外なく神様の敵として歩んでいました。神様に逆らう罪人として、神様の御怒りにしか値しない愚かな存在だったのです。みずからの意思で私たちは神様を拒んで、この方に従いたいなどとは思っていませんでした。でも私たちが罪人として歩んでいる時に、神の御子であるイエス・キリストをこの世に送ることを通して神様があわれみを示してくださったのです。そしてこの方が私やあなたのために十字架にかかって死んでくださって、本来であれば私やあなたが受けるべきその御怒りを代わりに受けてくださいました。イエス様が大きな犠牲を払って私たちに示してくださったあわれみは、私たちが何よりも必要としていた救いを与えてくださったということです。これこそが私たちが見て取ることのできる神様のあわれみでした。

そしてもしキリストを通して信仰によって、私もそんなあわれみを受けたのだと言われるのであれば、同じようにあわれみを示す者として、私たちも生きることが出来る者へと変えられたし、生きて行くことが必要になるのです。そして、周りの人たちに喜んで仕え、喜んであわれみを示す者が困難な状況に陥る時、神様が助けを与えてくださるとダビデは言っていました。1-3節「幸いなことよ。弱っている者に心を配る人は。【主】はわざわいの日にその人を助け出される。:2 【主】は彼を見守り、彼を生きながらえさせ、地上でしあわせな者とされる。どうか彼を。:3 【主】は病の床で彼をささえられる。病むときにどうか彼を全くいやしてくださるように。」と続いていました。このみことばからわかるように、どんなに神様の前を忠実に歩んでいこうとする者であろうとも、苦難に直面することは必ずあると教えてくれていまし

た。どれだけ周りの人に対してあわれみを示す者であろうとも、どれだけ周りの人たちのことを考えて必要を満たそうとするような者であったとしても、敵に責められて、病に苦しむことがあるのです。でもそのような中に置かれることがあろうとも、神様はその人を決して見捨てることはありませんでした。主はご自分の者をいつも守ってくださり、あわれみを持ってささえていてくださり、祝福を与えると約束してくださっていたのです。

だからダビデは2節の最後や3節の最後のところで「敵の意のままにさせないでください」、「彼を全くいやしてくださるように」と、強い確信を持って願うことができました。神様がそういうお方だとわかっていたからこそ、大胆に祈ることができたのです。もちろん、私たちが祈りさえすれば、いつも私たちの願うタイミングで苦しみが取り去られるわけではありません。もしかすると、その病との闘いが長く続いて、大きな痛みや悲しみを味わうかもしれません。まさに今、そのような苦しみを味わっている人もおられるでしょう。でも、そんな時にこそ、このみことばを覚えてください。決して変わらない神様は、ご自身の子どもを愛しておられて、弱さを覚える人にあわれみを示そうとするあなたのことを決して忘れてはいないということです。主はあわれみを示す者にあわれみを示してくださるお方です。人を救うことができ、どんな状況にあらうとささえることのできる力強い御手のうちに、私たちは拠り頼んで生きていくことができるのです。そしてそこに私たちはいつも必要な慰めや喜びを見出すことができます。

2. 助けを必要とする者を助け出してくださる方 4-10節

二つ目が続く4-10節に記されていました。ダビデは主があわれみを示す者をあわれんでくださる方であることを述べた後に、今度は自分自身の味わった体験、経験をこの4-10節に記しています。そしてその自分が味わった経験を通して、二つ目の主の姿を教えてくださいました。二つ目の主の姿は、助けを必要とする者を助け出してくださる方です。まず4節に「私は言った。「【主】よ、あわれんでください。私のたましいをいやしてください。私はあなたに罪を犯したからです。」」とダビデは記していました。ダビデはここで自分の罪に対する主のあわれみを求めていました。この後、5節、6節、7節と順番に見ていけば、彼は間違いなくこの時、大きな苦しみに直面していたことがわかります。彼は自分を憎む敵に悪口や偽りを言われ、ひどい病に冒されて打ちのめされていたのです。いのちの危険にさらされていて、今すぐに助けを与えられなければ、手遅れになって死んでしまいそうな絶望的な状況の中に置かれていました。

でも、そんな状況の中にいた彼がまずしたことは、苦しみからの助けを求めることよりも、自分の罪を認めて神様の前に正直に告白することでした。4節の最後にはっきりと「私はあなたに罪を犯したからです」と言っていました。ダビデはあわれみを求めていました。でも同時に、自分が罪人であることをよくわかっていたのです。ダビデは罪を言い表すことにおいて、言い訳することもなければ、だれかほかの人に罪をなすりつけることもしませんでした。自分の罪を隠すこともなければ、自分の犯した罪がほかのだれでもない神様に対するものであることを素直に受け入れていました。そしてありとあらゆる苦痛が降りかかっている中、真っ先に自分の犯した罪を神様に正直に告白していたのです。それは、そこに主のあわれみがあることをダビデがよく知っていたからです。箴言28：13に「自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。」と書かれています。(レジメの箴言28：13には後で出てくるIテサロニケ5：15のみことばがミスプリントされていますので訂正してください)ダビデは主の助けを求める前に自分の心をよく吟味していました。そして、自分の罪を正直に告白した者に、神様はあわれみを与えてくださることをわかっていたからこそ、その主のあわれみを求めていたのです。ダビデは、本来であれば自分のような罪人には主の助けなどそもそも値しないことをよくわかっていたのです。でも、神様のあわれみが必要です。だからその前に自分自身の罪深さを神様の前に告白していたのです。ダビデはただ素直に、神様の前に自分の罪を告白し、そしてそんな自分に対して、主があわれみ深くいてくださることを期待して、拠り頼んでいました。

そしてそのような祈りをささげた後で、ダビデは続けて自分の置かれている難しい状況をこんなふうに描くのです。5－9節に「:5 私の敵は、私の悪口を言います。「いつ、彼は死に、その名は滅びるのだろうか。」:6 たとい、人が見舞いに来て、その人はうそを言い、その心のうちでは、悪意をたくわえ、外に出ては、それを言いふらす。:7 私を憎む者はみな、私について共にささやき、私に対して、悪をたくらむ。:8 「邪悪なものが、彼に取りついている。彼が床に着いたからには、もう二度と起き上がれまい。」:9 私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。」と書かれています。ここを見ただけで、ダビデがどれほどの苦しみを味わっていたのかということは容易に想像できます。ダビデはまさに主のあわれみを必要としている状態にありました。ダビデの敵たちは、彼の悪口を言い続け、彼のことを傷つけようとしていました。しかも「いつ、彼は死に、その名は滅びるのだろうか」と、彼らは病を患っていたダビデが回復することよりも、死ぬことを望んでいました。それだけではなく、6節に「たとい、人が見舞いに来て、その人はうそを言い、その心のうちでは、悪意をたくわえ、外に出ては、それを言いふら」しと書いてありました。病の床にふせっているダビデのところに見舞いをして来る者たちも中にはいました。でも、彼らがそこで語っていることは本心ではなく、うそばかりでした。「良くなりますように」と口では言っていないながらも、その心では全然そんなことは思っていなかったのです。悪を働くことばかりを考えていました。

そんな敵の姿について、ジェームズ・ボイスという聖書注解者がわかりやすく、こんなふうに描いています。「取り巻きが王を見舞いに来たとき、彼らは正しいことを口にしてました。『ご病気とお聞きして、とても残念です。私たちはあなたのために今までも、これからも祈っています。本当に早く良くなれますように。他のことは全てお任せ下さい。何か私たちにできることはありませんか?』しかし、これらの言葉は全くの偽善でした。この人たちはダビデの回復を願っているわけでは一切無かったのです。彼らは彼の元を去った後でこのように言ったでしょう。『ダビデはひどい顔をしてませんでした?もう駄目かもしれませんね。まあ心配する必要はありません。このところ、彼は上手く色々な事を扱えてなかったし、変化の時ですよ。』彼らはダビデの前ではあることを言い、彼の前を離れると全く違うことを言っていたのです。」と。ひどい状態だと思いませんか?ダビデはこんな苦しみを味わっていたのです。自分をいたわって見舞いにやって来てくれていると思っていたその人たちは、実は自分の苦しむ様子を見て、間違っただけを人々の間で流そうとするような者たちでした。表面上は優しいことばをかけてくれているように見えても、内側では彼のことを憎んで、ひどい病に取りつかれている彼はもう二度とそこから起き上がることはないだろうと、その死を願っていました。ただでさえ、彼は自分が患っているひどい病気によって弱り果てていました。でもその弱り果てている彼のからだや心に追い討ちをかけるように、自分に悪を凶ることを喜びとするような敵たちが攻撃してきたのです。

例えばもし私たちがダビデと同じ立場に置かれたら、どのようにふるまうでしょう?余りにもひどい状況を目の当たりにして、悲しみを覚えて絶望し、あきらめてしまうのでしょうか?そんな苦しみを味わっている自分を顧みてくださらない主に対して、不満や怒りを覚えるのでしょうか?5－8節でも相当ひどいものを味わっていました。でも、ダビデが経験していた悲しみはこれで終わりではなかったのです。彼は敵によって責め立てられていましたけれども、それ以上に彼の心を打ち砕くものがありました。それが9節に「私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた」と書いてありました。ダビデは信頼していた友人からも裏切られていました。ともにパンを食べた——要するに一緒に食事をして親しい交わりをしていたような友のことです。困っている自分を助けてくれるはずの友です。そんな友が自分に「そむいて、かかとを上げた」のです。この「かかと」ということばは興味深いもので、創世記25章で、兄エサウのかかとをつかんで生まれた双子の弟の名前は何でした?それはかかとにちなんで名づけられたヤコブでした。では、あのヤコブがいったい何をしたか覚えていますか?ヤコブは彼の兄に仕えるのではなくて、兄をだまして父からの祝福を横取りしたのです。そのことが創世

記27：36に記されていました。そこに「エサウは言った。「彼の名がヤコブというのも、このためか。二度までも私を押しつけてしまって。私の長子の権利を奪い取り、今また、私の祝福を奪い取ってしまった。」とありました。本来、ヤコブという名前には「主が守ってくださるように」といった意味もありましたが、そこから「だます者」とか「あざむく者」といった否定的な意味合いを持つことになりました。かつてダビデが時間をともにして、彼が信頼していた友人たちも背を向けて、彼のことをあざむいて、彼のことを裏切った者たちだったということです。具体的にこの友人がだれなのかはよくわかりません。ある人たちは、これはダビデが信頼していた議官アヒトフェルではないかと考えていたりもします。アヒトフェルはⅡサムエル15章などに登場する人物です。そこに彼が裏切るところを見て取ることができません。でも結局それがだれであったとしても同じことです。心を許していた親友に、親しい交わりを持っていた友人に裏切られたということは、ダビデにとってどれほど辛いものだったでしょう。どれほど彼の心は失望を抱き、悲しんでいたでしょう。

そんなダビデよりも友の裏切りの悲しみを覚えた人物がいました。9節の後半のことばは、最後の晩餐でのイエス様のことばに引用されているのです。「わたしは、あなたがた全部の者について言っているのではありません。わたしは、わたしが選んだ者を知っています。しかし聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かってかかとを上げた』と書いてあることは成就するのです。」と、ヨハネ13：18に出てきます。イエス様と弟子たちはまさにパンをともに、食事をともにしていました。しかし、3年の月日とともにした弟子たちの中で、イスカリオテのユダはイエス様に背いて裏切りました。十字架につけるためにその身を引き渡したのです。イエス様こそ裏切られるという悲しみをご存じのお方でした。でもこうして改めてダビデが置かれている状況を考えてみると、彼は自分を憎む者たちによって、ひどく苦しめられていました。その中で床にふせって助けを求めようとします。でも、信頼していた友人たちは彼を裏切っていました。周りのどこにも助けを見出すことができない状況にあったのです。もし私たちがそんな状況に置かれるとすれば、果たしてどのようにふるまうでしょう？自分を悪く言う人たちが周りにいて、しかも自分の目の前だけではなく、陰で自分のことをおとしめるうわさを流している者たちがいて、それだけではなく、自分は大きな病を患い、抱えている苦悩を相談できる友もいない。そんな状況に私たちが置かれてしまえば、もしかしたら容易に心が騒いで、神様への信頼を失ってしまうかもしれません。喜びや平安を見出せなくなっているかもしれません。

でもダビデがしたことは変わりませんでした。彼は変わらずにあることを願うのです。それが10節に書いてありました。「しかし、【主】よ。あなたは私をあわれんでください。私を立ち上がらせてください。そうすれば私は、彼らに仕返しができます。」と。弱り果てていたダビデが願ったのは神様のあわれみでした。ダビデは4節でも「【主】よ、あわれんでください」と言っていました。10節でも同じことを言うのです。周りの人たちはだれも私を顧みてくれないけれども、主よ、あなただけは私をあわれんでくださいと。ほかのだれにも助けを見出せないような状況の中で、彼は主が自分に心を留めてくださって、あわれみによって必要な助けを与えてくださいと、繰り返し求めていたのです。それが彼にとっての助けの源でした。でも、この10節の後半部分を読んだ時に、混乱を覚えた人がいるかもしれません。ダビデは「そうすれば私は、彼らに仕返しができます」と言っていました。これを見た時に、えっ？ダビデさん、自分の手で仕返しをしようと考えているのだろうかと思ったかもしれません。でもこれは、彼が個人的な復讐を望んでいたのではありませんでした。今までにいろいろな箇所で見えてきたように、ダビデは神様が悪をそのままにされることのないお方であることをよくわかっていましたし、そしてご自分の者を守ってくださる方だということも覚えていました。神様に任せるということをダビデはずっと実践していたのです。また同時に、ダビデ自身の立場を考えてみた時に、この時ダビデはイスラエルの油注がれた王様でした。言いかえると、彼に対して反抗するというのは、彼の王国に対して反抗することと同じであって、彼の王国に対して反抗するということは、もっと言えば神様に反抗することと同じこと

になるのです。だからこそ、ダビデは王様の立場として、神様から与えられたその權威をもって、神様に逆らう者たちに対して正しく報いる必要があったのです。選ばれた王様であるからこそ、それが彼が持っていた責任であり、また特権でもありました。ですから、私たちがこの箇所を取って、私たちも今、個人的な復讐をすることはいいのですねと言うことはもちろんできません。みことばはそのようなことを教えているのではありませんでした。むしろ、私たちがみことばを繰り返し見た時に、私たちはさばき主である主の御手にすべてを委ねるようにと教えていることを見るのです。例えば I テサロニケ 5 : 15 に「だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行うよう務めなさい。」と記されていました。それが私たちに与えられた責任でもありました。

さて、ダビデはだれが見ても助けを必要とする困難な状況に置かれていました。悪口や偽りを口にするような敵たちに囲まれて、頼りにすることのできる友人もおらずに、病によってからだも心も弱り果てていたのです。そんな中であって、彼はどんな時も助けを与えることのできる方のあわれみに拠り頼んでいました。彼にとってほかに助けを見出せる場所はありませんでした。でも彼は同時に知っていたのです。私の主は助けを必要とする者を助け出してくださるお方だと。周りの人たちは変わってしまいました。周りの人たちは裏切ることもありました。でも、この神様は決して裏切ることも、変わってしまうこともない。私たちも弱さを覚えることがあったとしても、そんな神様に信頼して、この方の救いに揺るがぬ確信を置いて歩んでいくことができるのです。

3. 誠実に歩む者を誠実に報いてくださる方 11-12 節

そして、ほめたたえられるべき三つ目の姿が残りの 11-12 節に記されています。三つ目の姿は誠実に歩む者を誠実に報いてくださる方だということです。11 節からこう続いています。「:11 このことによって、あなたは私を喜んでおられるのが、わかります。私の敵が私に勝ちどきをあげないからです。:12 誠実を尽くしている私を強くささえ、いつまでも、あなたの御顔の前に立たせてください。」と。これまでも見てきたように、ダビデの敵たちは彼が病によって滅んでしまうことを望んでいました。もう二度とそこから起き上がることがないことを願って、いろいろな策略を立てていたのです。ダビデにとって一見すれば、悪が勝利をおさめたかのように思える状況もあったかもしれません。でも、そんな敵たちの願いも、策略も、すべて虚しく終わりました。なぜかというと、それは神様が彼のことを堅く守られていたからでした。誠実を尽くして歩んでいるダビデのことを神様は見捨てることはありませんでした。そんなダビデのことを喜ばれた神様は、弱った彼を強くささえ守り続けられたのです。だから 11 節の終わりに「私の敵が私に勝ちどきをあげないからです」と書いていました。いろいろな策略を立てていました。でも勝ちどきをあげることは決してないということです。悪が勝利することはありませんでした。神様は誠実に歩んでいる者を喜ばれて、その者の必要にふさわしいものを報いてくださるお方でした。ダビデのことを主は守られました。だから敵が勝ち誇ることもありませんでした。誠実な歩みを神様は喜ばれるということです。

もちろん、この誠実な歩みというものを考えた時に、これは罪を全く犯さないというものではありません。ダビデは罪がいつさいなかったから、神様に喜ばれたのかということ、もちろんそうではありません。むしろ彼はこの詩篇の中でも見たように、自分自身に罪があることをよく覚えていました。そんな罪ある自分自身が主のあわれみや助けを受けるに値しない存在だということも、彼は自分で認めていたのです。でも、同時に主の前に罪を犯した時に、それを素直に告白してあわれみを乞い求めながら歩もうとする者を神様は喜んでくださり、決して見捨てることはないということを彼は覚えていました。たとえ病気があったり、敵からの中傷があったり、悪意の中に置かれることがあって、弱り果てたとしても、神様に誠実に歩んでいる者たちは、神様が見放すことはなくて、その者に誠実に報いてくださるのだと確信を置いて歩んでいくことができるのです。ダビデはそのことを自分のこととして学んでいました。

確かにこれは41篇だけではありません。私たちは1篇から41篇までずっと見てきました。ダビデはいろいろな苦しみを味わっていました。いろいろな苦しみによって、彼は弱り果てることもありました。でもそうやって自分自身の弱さや罪深さを覚える時に、彼は自分の愛する神様の偉大さに心を留めていたのです。自分の罪深さを覚える時に、神様の恵み深さを覚えていました。41篇も変わりませんでした。ダビデは、神様があわれみを示す者をあわれんでくださるお方であり、助けを必要とする者を助け出してくださるお方、誠実に歩む者を誠実に報いてくださるお方なのだと覚えていたのです。そのような神様の姿を、彼はさまざまな試練を通して学び続けていました。ますます神様の偉大さを知っていったのです。

ですから、そんな神様に向かってダビデが最後に口にしたことばはそのとおりだと思いませんか？13節で彼は大胆に「ほむべきかな。イスラエルの神、【主】。とこしえから、とこしえまで。アーメン。アーメン。」と言っていました。このすばらしい神様を覚えた時、ダビデの口にあったのは「神様、ほめたたえます！」、それだけでした。では、私たちはどのように応答するでしょう。私たちが神様を深く知っていくということは、あなたの心に神様へのますますの愛を、賛美を増し加えているのでしょうか？大きな感謝や喜びを増し加えているのでしょうか？神様をますます知って、この方を礼拝する者として今を歩んでいこうとしているのでしょうか？私たちの愛するこの神様こそ、ほめたたえられるべき偉大なお方です。もしまだこの神様を個人的に知らない方がいるのであれば、どうか知ってください。このみことばが教えている神様は、必ず罪を正しくさばかれる方でもあります。みことばは私たちに教えてくれました。きょう、私たちが見たように、私たちは全員罪人でした。でもあの十字架を信じた者には、イエス・キリストによって救いが与えられるということを約束してくださっていたのです。もしこの神様を個人的に知らないのであれば、イエス・キリストを自分の救い主として知って帰ってください。兄弟姉妹の皆さん、この方に心を留めることです。神様の偉大さを見た時に、私たちにふさわしい応答は、「ほむべきかな。……【主】。とこしえから、とこしえまで。アーメン。アーメン。」、それだけです。そのような者として歩んで行きましょう。